

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520229

研究課題名(和文)江戸前期の思想・文芸における老荘思想受容についての研究

研究課題名(英文)A Study on the reception of Taoism in the former Edo period literature and thought

研究代表者

川平 敏文(KAWAHIRA, Toshifumi)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：60336972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：江戸前期の文学者・山岡元隣は、老荘と禅(仏教)とを表裏一体のものとして捉えている。これは江戸前期における老荘思想受容の特徴で、宋の儒学者・林希逸の老荘注釈の影響を受けたものと考えられる。また儒学者・南部草寿は、老荘思想と関連をもつ中国の教訓本『太上感應篇』を日本で始めて本格的に注釈しているが、彼の学問にも、林希逸と同じように儒教・仏教・老荘を一体のものとして見る傾向がうかがえる。

研究成果の概要(英文)：Genrin Yamaoka, a literary critic in the former Edo period, had regarded Taoism and Zen had been deeply interrelated. This point of view, which is a characteristic of the perception toward Taoism in the former Edo period, could be influenced by the notation of Kiitsu RIN, a Confucianist in the age of Song dynasty. Furthermore, a Japanese Confucianist Soju Nanbu had practically annotated Taijo-Kanno-Hen which is connected with Taoism for the first time in Japan. Like Kiitsu RIN, Soju Nanbu had tended to consider that Confucianism, Buddhism and Taoism had been interrelated.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：老荘思想 林希逸 山岡元隣 善書 岩田彦助 南部草寿

## 1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、江戸期における徒然草の注釈史・受容史を主な研究課題としてきた。鎌倉時代末期に書かれた徒然草を、江戸期の人々がどのように読んできたかを分析することによって、江戸人の思想や文学観の特性を明らかにしようとするものである。またそこから派生して、徒然草の筆者・兼好法師が、江戸期にはどのような人物として理解されていたかという問題についても取り組んだ(『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』2006年)。その結果、江戸期の徒然草および兼好法師像は、現代われわれが考える「随筆」あるいは「随筆家」というイメージとはかなり違った、「思想書」あるいは「思想家」としての側面が強いことが明らかになった。

ところで、その思想書としての徒然草受容の側面として、江戸人が本書を、老荘思想の入門書のごときものとして読む傾向があったという事実が挙げられる。そこで申請者は、江戸期における老荘思想受容の問題についても関心を持ち始めたのであったが、このとき注目したのが、江戸前期における、「俳諧寓言説」と呼ばれる一種の文学理論の流行であった。俳諧寓言説とは、俳諧の表現を『莊子』の文章論として知られる「寓言」に準え、特にその虚構性を積極的に肯定しようとしたもの。そして、その推進者であった岡西惟中の所説を中心に、その特質および成立背景を考察した(『寓言 惟中と伊勢物語学』2006年、「俳諧寓言説の再検討」2007年)。

この一連の考察過程で思い至ったのは、江戸期、それも前期における老荘思想受容の実態は、いまだ十分に把握されていないという事実である。もっとも、江戸期全般を見渡してみれば、中期以後のそれに関する研究は、かなりの蓄積がある。たとえば、荻生徂徠一派を中心とした老荘思想研究の気運、およびそれと関連すると見られる「~老子」「~莊子」と銘打った教訓的な戯作類(談義本)の叢生といった問題については、中野三敏の研究(『戯作研究』1981年)が委細を尽くしている。また近年では、上述の談義本の中で用いられる「寓言」の手法が、江戸中・後期小説を特徴づける「奇談」というジャンルの成立に深く関わっていると看する、飯倉洋一の一連の研究(「上方の「奇談」書と寓言 『垣根草』第四話に即して」2004年、ほか)が特記される。

それに対して、江戸前期における老荘思想受容の研究を顧みるに、思想史的なアプローチとしては、大野出の研究(『日本の近世と老荘思想』1997年)や、長尾直茂の研究(「即非如一禅師の『老子虜齋口義』校刊について」2009年)などがあるが、なお未解明の部分が多い。また文学の側からの研究についても、上述の「俳諧寓言説」の問題を除けば、江戸中期以後のそれに比べて、その究明は大いに立ち後れていると言わねばならないだろう。そこで本研究では、老荘思想が江戸前期の思

想形成にどのような役割を果たしたのか、またそれが当時の文学(主に散文)の中にどのように立ち現れてくるのか、さらには、それがのちの思想・文学史とどう関わっているのか、などの諸点を明らかにしたいと思う。

## 2. 研究の目的

### (1) 林希逸の老荘注釈

このような問題を考察するには、まずその最も基本的な問題として、彼らが具体的にどのような形で、老荘思想を受容したかを知らなければならぬ。一般に、江戸前期に権威があった老荘の注釈書は、宋の林希逸が著した通称「林註」、対して中期以後は、徂徠門流の古文辞学の影響から、晋の郭象が著した通称「郭註」がそれに取って代わると言われる。しかし、この把握は実態に即したものであろうか。本当に林註は中期以後、全く参照されなくなってしまったのか。全国各地に点在する林註を書誌調査することで、その流布状況を明らかにしたい。

### (2) 山岡元隣の仮名草子

江戸前期の俳諧師であり古典学者であった山岡元隣は、仮名草子と呼ばれる散文小説の作品もいくつか残している。『誰が身の上』『小盾』『宝蔵』などがそれであるが、これらの作品には、同時代の他の作品に比べて、老荘的な視点や修辞を使用することが多い。その理由を探ることは、江戸中期の佚斎樗山著した『田舎莊子』以降の、いわゆる老荘モノ談義本の隆盛との繋がりを考える上で有効であろう。また上述の元隣の著作が出版された少しあと、韻文の世界では「俳諧寓言説」が流行することになるが、そのこととの因果関係も見極める必要がある。

### (3) 陽明学派と老荘思想

上述の佚斎樗山については、中野三敏によって、陽明学者・熊沢蕃山の思想に強い影響を受けていることが明らかにされている(前掲著書)。しかし私見によれば、蕃山の師である中江藤樹の著述の中にも、すでに老荘への親炙を示す発言が見受けられる。とすればこの問題は、樗山のみに限らず、陽明学派と老荘思想という、より広い視点で考えてみる必要がある。またその考察は、(2)に挙げた元隣の著述、あるいは樗山以降の老荘モノ談義本の精神を考えることとも、おのずから関連してくるであろう。

### (4) 『太上感應篇』の受容

また、この時期の老荘思想受容の一態として、老荘そのものではないが、中国・明末頃に流行した庶民教訓書(「善書」)で、道教系の思想がその基盤にあるとされる『太上感應

篇』の受容という点にも注目したい。本書の日本における受容史については、早く酒井忠夫『中国善書の研究』(1960年)に先鞭がつけられているが、注釈書類の精査などはいまだ為されていない。これは老荘思想受容の広がりという点を考える上で有効なテーマであると思われるので、その受容のあり方、およびその思想・文学史における位置づけについて考察したい。

### 3. 研究の方法

#### (1)平成 23 年度

##### 林希逸の老荘注釈

本年度はまず、「研究目的」(1)の調査を開始する。この調査は、1年目～3年目を通して継続的に実施する。長澤規矩也著『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』(2006年)によれば、林希逸が『老子』『莊子』『列子』に注釈を施したいわゆる「林註」は、江戸前期に、それぞれ6～12種類の諸本が刊行されていることが分かる。しかし、これらは厳密に諸本の異同が検証されたものではないと考えられるので、その確認作業が必要である。また、全国の図書館に点在する林註を丹念に実地調査していけば、まだ認知されていない版式を持ったものが発見される可能性もある。

##### 山岡元隣の仮名草子

本年度はまた、「研究目的」(2)に取り組む。元隣の著述は、『日本古典籍総合目録』(国文学研究資料館WEBサイト)で検索すると、30件が登録されている。そのうち現存が確認されるのは22点ほどで、さらにその中でも仮名草子にあたるものは、『他が身の上』『古今百物語評判』『宝蔵』『小扈』の4作品である。そこでこの4作品を中心としながら、他の著述類も適宜参照しつつ、元隣の老荘受容の実態と、同時代および後世におけるその位置付けを考察する。

具体的には、まず4作品について、老荘受容の可能性があると思われる箇所を抽出し、キーワードを付けながらエクセルに入力する。その後、各作品間における類似点・相違点を整理しながら、彼の老荘受容の特色と傾向、およびその理由を分析する。

次に、元隣の老荘受容と、彼の死後、岡西惟中によって主唱される「俳諧寓言説」との間にもどのような関連があるかについて、両者の俳諧関係の著述(主として序跋部分)あるいは両者が共に残している徒然草の注釈などを参考としながら考察を加える。

#### (2)平成 24 年度

##### 林希逸の老荘注釈(継続)

前年度に引き続き、書誌調査を行う。

##### 陽明学派と老荘思想

本年度はまた、「研究目的」(3)に取り組む。

「陽明学派と老荘思想」といえば佚斎樗山であるが、ここでは主として、樗山以前のそれについて考察を深める。具体的には、中江藤樹・熊沢蕃山を始めとする陽明学者たちの所説を調査し、その老荘思想への学的態度を窺う。

さらに、佚斎樗山以降の老荘モノ談義本において、その老荘受容姿勢がどのように変化していくのかについても考察を及ぼしたい。この調査には、現勤務校である九州大学読本コレクションに所蔵される原本類を利用する予定であるが、これらは未翻刻のものがほとんどであるので、大学院生数名の協力を得て、適宜翻刻紹介を行うこととする。

#### (3)平成 25 年度

##### 林希逸の老荘注釈(継続)

前年度に引き続き、書誌調査を行う。

##### 『太上感應篇』の受容

本年度はまた、「研究目的」(4)に取り組む。『太上感應篇』の諸本については、中国から輸入された唐本のほか、『和刻本漢籍分類目録』(前出)によれば、日本で刊行された和刻本が15種類存在することが知られている。これらの書誌調査については、1～3年目の「研究目的」(1)の遂行にあわせて行い、本年度はその補完に当てる。

また、本書の注釈書については、特に江戸前期の儒学者・南部草寿の『太上感應篇俗解』(1680年刊)を中心に考察を進める。本書は『神道大系』論説編16「陰陽道」に、すでに翻刻が収録されているが、やはり原本の影印などを手元に備えておき、適宜参照できるようにしておく。

具体的な作業としては、草寿の他の著述、特に『徒然草諺解』(1669年刊)という徒然草の注釈書の内容と比較検討することで、その編述意図および彼の思想の特質を浮かび上がらせる。

### 4. 研究成果

#### (1)平成 23 年度

本年度はまず、江戸時代における老荘受容に関する研究史について、とくに江戸前期の俳諧寓言説、および中期の老荘物談義本の問題を中心に概観し、今後残された課題についても言及した(「研究領域間の架橋へ向け」)。日本思想史・中国文学史といった、隣接領域における研究成果も参照しているので、今後このテーマを包括的に研究するための指針となることを期待している。

次に、江戸前期の文人・山岡元隣の仮名草子における老荘受容の問題について考察した(「江戸前期における禅と老荘 山岡元隣論序説」)。元隣の老荘受容は単体でなされたものではなく、禅を経由したものであった

ことを指摘した。江戸前期は禅が通俗的なかたちで普及した時代であったが、当時老荘は禅と表裏一体のものとして理解されており、元隣のような老荘受容の仕方は、当時ある程度一般化できることも示した。

さらに、江戸前期の朱子学者・林読耕齋の、林註に対する態度について考察した（「林読耕齋と『林註莊子』」）。読耕齋は父・林羅山の弟子であるが、同門の兄・鷲峰や、人見ト幽軒らの『林註莊子』に対する温和的態度とは違って、その三教一致的な姿勢を筆鋒鋭く批判している。同じ林家一門といえども、微妙な温度差があることを示した。

## (2)平成 24 年度

本年度はまず、山岡元隣の仮名草子『宝蔵』巻一前半部にかんして、その詳細な注釈を発表した（「山岡元隣『宝蔵』箋註（一）」）。この作業によって、元隣が和漢のどのような典籍を踏まえながら本作品を述作したのかが明らかになった。特に元隣の老荘観が、本作品の世界観として色濃く横たわっていることが確かめられた。

次に、佚斎樗山以降の老荘受容史への見通しをつけるため、樗山の存疑作とされてきた『従好談』（1729 年刊）を取りあげ、その著者および内容の特徴について考察し、口頭発表した（「享保期教訓本作者考 岩田彦助のこと」）。この発表の中で、本作は樗山の著述ではなく、秋元藩江戸家老であった岩田彦助なる人物のものだということ、また彦助の思想は熊沢蕃山の強い影響を受けていることを明らかにした。

なお本研究は、平成 25 年度に論文化した（「岩田彦助の人と思想 佚斎樗山・熊沢蕃山との関係」）。また『従好談』についても、平成 25 年度に詳しい書誌解説を付して翻刻した（「『従好談』 翻刻と解題（一）」）。

## (3)平成 25 年度

本年度はまず、老荘思想の影響もある中国の善書『太上感應篇』受容史の一端として、近世前期の儒学者・南部草寿の『太上感應篇俗解』（1680 刊）を取りあげ、彼の伝記および思想の特色について考察した（「聖堂儒者の人と思想 南部草寿伝略」）。その結果、草寿の思想は従来考えられてきたような純然たる朱子学ではないこと、善書的な三教一致観や教化意識をもっていたことが判明した。

次に、前年度に引き続き、山岡元隣の仮名草子『宝蔵』巻一後半部の注釈を公表した（「山岡元隣『宝蔵』箋註（二）」）。

さらに、本研究の総まとめに代わるものとして、江戸時代における老荘思想受容の概要を執筆した（「老荘思想」）。通史的なもので

はあるが、本研究のなかで考察した林註の受容、俳諧寓言説、善書との関連などの知見を盛り込んだ。

また林註の書誌的研究については、現在データ整理中である。ただし、江戸中期以降、林註が郭註に取って替わられたという定論については、たとえば江村北海の『授業編』巻五「子学」に、初学の徒が『莊子』を読むには郭註ではなく、「前々より和版におこり何れの家にもありふれたる林希逸が口義にて事足るべし」云々とあることなどを見て、改める必要があると思われる。林註の受容は、江戸中期以降も続いてきたと見てよい。

## (4)今後の展望

上記の研究成果を通じて、従来研究がさほど進んでいなかった、江戸前期における老荘受容の実態およびその特質が、かなり具体的に分かってきたと思われる。特に山岡元隣の老荘受容については今後も考察を進めていきたい。

また、研究目的(3)「陽明学派と老荘思想」については、当初の研究計画からやや逸れた結果となってしまった。ただし、佚斎樗山の存疑作『従好談』の真の著者が解明したことによって、樗山の思想の輪郭がよりはっきりとしたため、間接的に研究計画の一部は達成できたのではないかと考える。

その他、平成 26 年 7 月には、山岡元隣『宝蔵』巻二前半部の注釈を公表する予定である（山岡元隣『宝蔵』箋註（三）」）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

川平敏文、「山岡元隣『宝蔵』箋註（三）」、『雅俗』13 号、雅俗の会、査読有、2014 年 7 月刊行予定

川平敏文・村上義明、「『従好談』 翻刻と解題（一）」、『文献探究』52 号、文献探究の会、査読無、2014 年

川平敏文、「岩田彦助の人と思想 佚斎樗山・熊沢蕃山との関係」、『近世文芸』98 号、日本近世文学会、査読有、2013 年

川平敏文、「山岡元隣『宝蔵』箋註（二）」、『雅俗』12 号、雅俗の会、査読有、2013 年

川平敏文、「山岡元隣『宝蔵』箋註（一）」、『雅俗』11 号、雅俗の会、査読有、2012 年

〔学会発表〕（計 1 件）

川平敏文、「享保期教訓本作者考 岩田彦助のこと」、『日本近世文学会、2012 年 10 月 27 日、福岡大学

〔図書〕(計5件)

川平敏文 他、『中国日本 漢文化大事典』、  
明治書院、2014年5月刊行予定、頁未定(「老  
荘思想」の項)

川平敏文 他、『長崎・東西文化交渉史の文  
化の諸相』、勉誠出版、2013年、396-416  
(「聖堂儒者の人と思想 南部草寿伝略  
」)

川平敏文 他、『江戸の文学史と思想史』、  
ペリかん社、2011年、194-201(「林読耕斎  
と『林註莊子』」)

川平敏文 他、『江戸の文学史と思想史』、  
ペリかん社、2011年、170-193(「江戸前期  
における禅と老荘 山岡元隣論序説 ）」)

川平敏文 他、『江戸の文学史と思想史』、  
ペリかん社、2011年、158-169(「研究領域  
間の架け橋へ向けて」)

〔その他〕

ホームページ等

<http://blogs.yahoo.co.jp/kanzanshi>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川平 敏文 (KAWAHIRA, Toshifumi)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：60336972